

わたしが命のパンである

ヨハネによる福音書 6:24-35

（五千人がパンを食べた翌日、その場所に集まった）群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜し求めてカファルナウムに来た。そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか」と言った。イエスは答えて言われた。「はっきり言うておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。」そこで彼らが、「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」と言うと、イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。」そこで、彼らは言った。「それでは、わたしたちが見てあなたを信じるができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。わたしたちの先祖は、荒野でマンナを食べました。

『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」すると、イエスは言われた。「はっきり言うておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。」

そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言うと、イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない。」

説教

先週はパンの奇跡の出来事でした、きょうの福音はその続きになります。そして来週もヨハネ福音からその続きとなります。

5000 人の人にパンを与えることができるイエスはすごい業、力がある、つまり奇跡をおこせる、ということに驚いて素直に感心しているうちはいいいのですが、そのうち、奇跡をありがたがっていることが、なんか悪いこと、自己中心、自分勝手な思い込み、のようにも思えてきます。というのは福音書で証言されるイエスは、群集の反応をきらって逃げ出すという行動にでるからです。イエスのほんとうの狙いと人々の受けとめ方の間にずいぶんと開きがあるのかなあ、ということに気づきます。その開きを埋めるといふか、違う点を探ってみようと、先週は少年の視点からみてその奇跡はどう映るのか、ということをおこつと考へてみました。

ところで昨年、東京の代々木公園に遊びに行ったとき、とつぜん長い行列に出くわしてわたしは驚きました。路上生活者（当時公園には 300 人ていどの人が住んでいた）に食料を配る奉仕活動の順番待ちの行列でした。奉仕活動する団体が何台かのバンに食料を積んで代々木公園で欲しい人たちに無料で配っていました。さまざまな団体が奉仕していて、ほぼ毎日その活動を行っているという話をきいて感心した覚えがあります。

イエスがパンの奇跡によって教えたかったことと、民衆の受けとめ方の違いに焦点をあててヨハネ福音書は語ります。イエスはパンの奇跡を通して自分こそがいのちのパンだということを悟って欲しいのに、民衆は違う受けとめ方をしてしまうということです。

あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。6:26

ずいぶん手厳しい言い方をイエスはされます。

つまり、ただパンが欲しいからわたしの後をつけまわすのだろう、と人々にいいます。代々木公園では人が人にタダでパン（わたしが見たのは弁当でしたが）を毎日与えているのに、イエスはパンの奇跡を一回だけおこない、もうあげないと人々をつきはなします。なぜでしょう。イエスは続いてこう説明します。**朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。6:27**

群衆の「いつここに来たのですか」という問いに対してなんのことやらさっぱりわからない（福音書を読んでいるわたしたちにとって）解答で答えます。わからないままに福音書を読み進めていくとイエスは宣言します。

わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。6:35

きょうはヨハネ福音の6章からみことばを聞いていますが、4章でイエスはこのように言われました。

イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渴く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」4:13-14

サマリアの水汲み女とイエスとの一連の問答の結論です。4章では「水」6章では「パン」です。こうイエスにつきつけられたサマリアの女はただちに女は言った。「主よ、渴くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」4:15

このあとイエスと女の問答は続きつつ深まり、ついに彼女はイエスをメシアと理解します。そして彼女の住むサマリアの村全員がイエスを信じたというはなしでした。

このサマリアの女のエピソードの合間にそっと滑り込ませているような短いやり取りがイエスと弟子たちとの間にあります。水のはなしだったのに唐突に食べ物の話になります。

イエスは、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われた。弟子たちは、「だれかが食べ物を持って来たのだろうか」と互いに言った。イエスは言われた。「わた

しの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。4:32-34

これをヒントに「いのちのパン」とはなにかを見てみると、4章のイエスのことばで6章を解説すればこうなります。

朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。6:27

これが6章27節でイエスが説明した内容です。では「食べ物のために働く」とはなにかというと4章でイエスはこのように具体的に説明しています。**わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。**

お遣わしになった方、すなわち神、み心をおこなうとは神の思いを現実に実行し、そして成し遂げること、それがあなたがたの知らない食べ物つまり「いのちのパン」といっています。

6章の群集はここまでのイエスのことばを引き出しました。それはイエスのもとに押し寄せた群衆たちの力です。力と云ったらおかしな言い方（どうみても無力な者たちの集団に力なんてあるのかという意味で）ですが、人々が救いを願い求める強い思いです。

しかし、群衆の中にはいろいろな思い、それぞれにとっての救いのイメージ、をもつ人がいたことに思い当たります。

パンの奇跡を目の当たりにした人はイエスの力に驚き、おののき、イエスを王と直感してパンのおかわりではなく、イエスを王にかつぎあげようとして押し寄せたのではないか？だとすると、それは利己的な権威主義ではないのか。

また、ほんとうに貧しい人たちは、ただおかわりのパンが欲しくてイエスの元に押し寄せたのではないか？もし、そうではないとすると、どういうつ

もりでイエスの元に押し寄せたのか。また、イエスのわたしがいのちのパン
なのだと宣言は彼らにどのように響くのか？

4章ではサマリア人たちはみんなイエスをメシアと信じた、というハッピー
エンドになっていましたが、ここ6章のガリラヤ人たちはまだイエスを信じ
ないところがあるようです。さて、イエスはどうするのか、ガリラヤの人た
ちはイエスにどう反応するのでしょうか。この続きは来週にもちこしです。
